

平和のバトンへの願いとともに

市民の戦災を語り継いで

二〇〇二年に東京・江東区に開館した東京大空襲・戦災資料センターは、災禍を伝えていくことを願う人々の寄付によって設立された民立・民営施設だ。「東京大空襲を記録する会」の推進者で、同センターの設立でも中心的な役割を果たしてきた早乙女勝元さんに話を聞いた。

作家

早乙女勝元

●さおとめ・かつもと 1932年東京都生まれ。12歳で東京大空襲を体験。工場で働きながら17歳で執筆を始める。主な著書に『わが街角』『東京大空襲』『私の東京平和散歩』など。2002年より東京大空襲・戦災資料センターの館長を務める。

平和利用と安全神話

まず、「平和」とは何かということから考えてみましょう。私はそれを、ごくごく平凡な日常と考えています。朝起きて顔を洗い、歯を磨いて食事をし、子どもたちは学校へ、大人は職場へと出かけて行く……。そういう日々が当たり前が続いてい

く生活こそが平和であると。ところが、その日常が一気に非日常と化してしまったのが一昨年(2011)年3・11ではないかと思えます。

未曾有の大地震と大津波。そこまでは天災でしたが、福島第一原発からの放射能の拡散は人災でした。被曝した人たちに今後どんな影響が出てくるのか、まったくの未知数ですが、ベトナムで枯れ葉剤による先天

奇形の子どもたちがいまも生まれていることが気になります。ベトナム戦争が終わったのは一九七五年。四十年近くが過ぎようとしているのに、いまだに二世、三世に影響が出ている。そういう子どもたちが暮らす施設などに行ってみると、その事実の重さに鳥肌が立つ思いがします。

福島ではいまだに十五万人の人が避難を余儀なくされているという

のに、政府はとっくの昔に収束宣言を出しているどころか、最近では再稼働・輸出に躍起となっている。しかも、輸出先の筆頭がベトナムだと聞くと、呆れて物も言えません。

原発に対して、やはり私たちも油断がありました。まず、「安全神話」です。日本の科学技術をもってすれば絶対安全だと言われて、注意を欠

いてしまった。それともう一つが「平和利用」という言葉だったのではないでしょうか。

平和利用と安全神話、この二つはかつての戦争の発端にびつたり重なる部分があります。たとえば昭和十六年十二月八日に太平洋戦争が勃発したとき、天皇による開戦の詔書が出されましたが、そこには「平和」という文字が六回も出てくるんです。前半の三回は、ある国々が東洋の平和を脅かしている、という文脈で使われています。だから、こちらがその平和を回復するべく、と。残り三回が、日本は平和のために戦うんだぞということですよ。

よその国を侵略してやるとか、植民地支配をするのだと公言したんじゃない、国民は誰もついてきません。東洋の平和、つまり大東亜共栄圏の解放という美名のもとに国民をたぶら

かし、幻惑させたんです。どこで、どのように戦争を終結させるのかという方針なんか、まったくなかった。結果として、想定外の人命が失われた……という過程を見ていくと、今回の福島第一原発の事故は、過去の教訓を私たちがきちんと学ばなかったからこそ、このような事態を招いたのではないのでしょうか。

未曾有の無差別爆撃

太平洋戦争について語るといくらか時間があっても足りないので結末へと急ぎますが、昭和十九年、一九四四年の十一月から、日本が仕掛けた戦争の形態が質的にならんと変わりました。日本の国土が戦場化したのです。B29という米軍の爆撃機が日本を叩くために開発され、東京から二千三百キロ地点のサイパン、テニ

